



茅ふきたより

も く じ

- 01 巻頭によせて
- 02 会からの報告
- 08 第一回茅葺きフォーラム開催 富山県南砺市五箇山にて
神戸大会2009をふりかえって

巻頭によせて

安藤邦廣

一般社団法人日本茅葺き文化協会
代表理事

一般社団法人日本茅葺き文化協会は、茅葺きの文化と技術の継承と振興をはかり、もって日本文化と地域社会の発展に資することを目的として、平成二十二年二月三日に設立されました。

茅葺きは日本の民家や社寺の屋根として、気候風土に適応し、多様で地域性豊かな民家と農村景観をつくりあげてきました。また、茅は、屋根葺き材料としてだけでなく、貴重な植物資源であり、養蚕業や畜産業の肥料や飼料として、農山村の暮らしを支えてきました。しかしながら、生活の近代化や都市化が急速にすすむ中で、茅葺きは、過去のものと思われ、その姿は急速に失われつつあります。

その一方で、近年、茅葺きの民家や農村景観が日本人の原風景として失ってはならないもの、あるいは村おこしや町づくりをすすめる上での拠り所や地域資源として再評価されています。また、断熱性と通気性を兼ね備えた、茅葺き屋根の優れた居住性が見直され、茅は、石油に替わる持続可能で循環する植物資源としても注目されています。

このような社会情勢の中で、当協会は茅葺きの歴史、文化、技術を正しく理解し、茅葺きの優れた特性と、現代社会で茅葺きの民家や景観を存続する上での課題を明らかにし、それを広く世の中に伝え、茅葺きの文化と技術の継承と振興を図るための事業に取り組んで参ります。

皆様には、当協会の趣旨にご賛同していただき、共に事業に取り組み、必要なお協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

会からの報告

第一回茅葺きフォーラム開催 富山県南砺市五箇山にて

設立第一回となる日本茅葺き文化協会の総会、フォーラム、見学会を、2010年6月26日・27日に富山県南砺市で開催しました。180名のみなさまにご参加いただきました。



「茅葺きの暮らしと生業」と題した今回のフォーラムは、世界遺産登録15周年を迎えた五箇山合掌造り集落の富山県南砺市で開催した。

第一回茅葺きフォーラムに先立ち、代表理事の安藤邦廣から平成22年2月3日に一般社団法人日本茅葺き文化協会として法人設立をした旨の報告があった。設立の挨拶にかえて、日本の茅葺き文化とは何かという問いかけをし、次の4つを挙げた。1、茅は資源 万葉の頃から日本人の暮らしを守ってきた草資源である茅について、屋根を葺く材料であるとともに、牛馬の飼料、田畑の肥料でもあり、茅という資源が地域のエネルギーの源であったことをさらに研究し、屋根葺きの材料としてだけでなく、貴重な



資源として捉える視点が必要である。2、茅は生業 茅で人々は暮らしを営んできた。江戸から昭和にかけて栄えた養蚕業では、蚕を育てるための桑畑を育てたのは茅の肥料であった。これは茅資源に支えられた山の暮らしの歴史の中では、ほんの一端に過ぎないが、人々が茅を刈り、茅場を守ってきたことをもっと深く知り、人々の生業や経済によって民家はつくられ、暮らしが成り立っていることを考える必要がある。3、茅葺きの暮らし 茅

葺きが夏涼しく冬暖かいと言われる一方で、寒い、暗い、虫がいるなど茅葺きの難しい側面だけをとらえる意見もある。これらに対する温熱環境の科学的な研究をすると同時に、茅葺きは落ち着く、安らぎを覚えるという意見にあらわれるように、日本人の根源的な話の中で、茅葺きをどう捉えていくか議論する必要がある。4、茅葺きの技 職人の技術とともに、職人ではなく結のように共同で屋根を葺くという仕組みがある。多様でその地域固有に生まれて培われてきた技を、これから未来へどのように伝え、発展させていくかという課題が我々に課されている。以上のように茅葺きの「資源」「生業」「生活」「技術」という4つのテーマをもとに、茅葺きの文化は非常に深く厚みがあるという認識を持って、みなさんと取り組んでいきたいと話した。

開催地である南砺市長の田中幹夫氏は、いまこの地域で、生活自体が多種多様化し、高齢化が進む中で、どうやってこの地域を守り、次世代に繋いでいくのかが課題になっている。そんな中で、茅葺きの世界遺産があるこの地域が助けになるのではない。豊で確かな未来は、懐かしい過去にあるのではない。日本人の美徳であるボランティア精神、利他の心、これらが集まって生業があり暮らしがあり文化がある。今日の会で皆さんとこのことをしっかりと考え、全国、世界に向けて発信をして、多くのサポーターを見

■大会プログラム 2010年6月26日(土)

あいさつ

代表理事 安藤 邦廣 (筑波大学教授)
 南砺市長 田中 幹夫
 来賓祝辞 白川村長 谷口 尚
 富山県西部森林組合長 桃野忠義

開催地報告

「行政の取り組み」(南砺市教育委員会)
 「相倉合掌造り集落」図書健裕(相倉区長)
 「菅沼合掌造り集落」中島慎一(越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会)
 第1セッション「いろいろを復活しよう」

座長 上野美帆(理事・財都市農山漁村交流活性化機構)
 「いろいろと食文化」 甲斐良治(社農山漁村文化協会)
 「いろいろと五箇山文化」 北厚子(越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会)
 「いろいろと生活」 村上和子(岩手・茅葺き民家を残す会)
 「茅葺きの燻蒸効果」 古海賢一(栃木・株式会社茅葺き屋根保存協会)

第2セッション「茅葺きは地場産業になるか」

座長 米山淳一(理事・地域遺産プロデューサー)
 「カリヤスの茅刈りと茅葺き 森林組合による取り組み」
 山口健一(富山県西部森林組合五箇山支所)
 「ヨシ刈りとヨシの利用 琵琶湖での取り組み」 小寺實
 (滋賀・ウォーターステーション琵琶湖子供環境班代表)
 「スキの生産と販売」 長田友和(静岡・有限会社富士勇和産業)
 「根場いやしの里と上条集落の取り組み」 石川重人(山梨・伝匠舎
 株式会社石川工務所)
 「茅葺き職人から事業所への展開」 中野誠(京都・美山茅葺き株式会社)
 「南アフリカ共和国の茅葺き業」 田揚裕子(工学院大学大学院工学研究科)

閉会あいさつ 理事 江面嗣人(岡山理科大学教授)

情報提供 「麦わら葺きを復活しよう」 西尾晴夫
 (公益社団法人社寺等屋根工事技術保存会)

■見学会 6月27日(日) 9:00～13:00

相倉合掌集落～相倉茅場～屋根葺き替え現場「重要文化財岩瀬家」
 ～菅沼合掌集落

つけて地域づくりに邁進していきたいと話した。

来賓として、当協会の前身である全国茅葺き民家保存活用ネットワークの会長を務めた白川村長の谷口尚氏と、五箇山の茅葺き事業を担う富山県西部森林組合の組合長の桃野忠義氏から祝辞をいただいた。

開催地報告

「行政の取り組み」

南砺市教育委員会 文化課長 浦辻一成



五箇山（五ヶ山）とは、旧平、上平、

利賀村を合わせた地域の古くからの呼び名であり、1973年頃（室町時代）から定着して使われていた。五箇山にある茅葺きの文化財は以下の通り。国指定重要文化財として、白山宮鞘堂、村上家、羽馬家、岩瀬家の4棟、国史跡の相倉集落に27棟、菅沼集落に14棟、県指定として、流刑小屋など5棟、市指定として4棟、指定外として40棟。これらの合掌造り家屋の屋根の葺き替えに対しては、指定の文化財に対しては、国、県、市の補助金により、所有者の負担は3～5%にとどめ、さらに指定外のものに対しては、合掌造りの建物は貴重であり、観光資源とみなすとして、観光課の補助金などを充て、所有者の負担を10%程度におさえている。これらの茅葺き屋根の葺

き替えについては、屋根葺替台帳を作成し、分割して葺き替える屋根面が、それぞれ葺き替えから何年経っているか一目で分かるように管理し、計画的に葺き替えを行っている。

「相倉合掌造り集落」

相倉区長 図書健裕



岐阜県を分水嶺とした庄川は、白川郷、五箇山、砺波平野を通って日本海へ注ぐ。相倉集落は、庄川の川面からやや離れた段丘面に位置する標高4003前後の地である。昭和45年に国指定史跡となり、合掌造り集落保存の第一歩を歩みだした。その後、平成6年に重要伝



統的建造物群保存地区に、平成7年に世界遺産に登録された。合掌造りの特徴としては、斜面に生えた根曲りの木を利用したチョンナ梁など、専門職である大工によって建てられた一階部分と、集落の人が互いに助け合って建てた、マンサクと藁縄で結われた小屋組部分に分けられる。かつてはこの大きな小屋裏空間で養蚕を行っていた。相倉集落の価値は合掌造り家屋だけにあるのではなく、次のようなものがある。1、山間地における農村風景 集落の背後にある段々畑の石積み的美しさ、その石積みの上に広がる広葉樹林は集落を雪崩から守る雪持ち林

2、景観に配慮 電線の地中埋設、地区民の共同駐車場を地下式格納庫としているなど 3、茅の管理 代々受け継ぐ個人の茅場があり、秋に茅を刈り保管庫で越冬して翌年の葺き替えに使っている 4、四季折々の観光 5、合掌造り相倉集落保存財団の設立。

今後の課題は、1、人口の減少と少子高齢化の問題 2、景観の保存と生活優先の集落づくりのありかた 3、観光の推進と住民のプライバシーの保護のありかたがある。



「菅沼合掌造り集落」越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会副会長 中島慎一



菅沼集落は旧上平村にある。人口約30人、12軒の家のうち、9軒が合掌造りで、内7軒は今でも生活している。相倉と同じく、昭和45年に国指定史跡となり、平成6年に重要伝統的建造物群保存地区に、平成7年に世界遺産に登録された。今は森林組合に委託しているが、昔は急斜面の茅場で茅刈りをし、束ねた茅を国道まで転がり落とし、家に運び、雪囲いをし、屋根葺きに使っていた。越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会は、世帯主と家族で成人したもののすべてがメンバーとなり、菅沼集落の保存に取り組んでいる。

第一セッション「いろりを復活しよう」
座長 上野美帆（理事・財都市農山漁村
交流活性化機構）

「いろりと食文化について」

甲斐良治（社農山漁村文化協会）

「たび」は「旅」という字を今は使っているが、「他火」、他の火にあたる、つまり他所の家の囲炉裏にあたることを意味するという話がある。自らの故郷である宮崎県高千穂町でおきているさまざまな取り組みを紹介した。また、宮崎では牛馬の飼料として秋に茅を刈っていたが、その際、刈干切り唄という作業唄を歌っていた。この唄には、茅刈りの様子とともに千木の置かれた茅葺き屋根も歌われている。「ここの山の刈干や すんだよ

明日は田んぼで 稲刈ろかよ

もはや日暮れじゃ 迫々かげるよ 駒よ

いぬるぞ 馬草負えよ

屋根は茅ぶき 茅壁なれどよ 昔ながら
の千木を置くよ」

「いろりと五箇山文化について」 北厚子
（越中五箇山菅沼合掌造り保存顕彰会事務局）

囲炉裏は茶の間であるオエにあり、今

でも暮らしの中心となつてゐる。煮炊きをする場所でもあり、家族が集まる場所でもあり、対話する場所でもある。また、五箇山は「筑子節」をはじめとして多くの民謡があるが、大人から子供へ民謡を教え、民謡を語る場所でもあり、時には囲炉裏の灰に字を書いて教えたりもした。暖房でもあり、物干の場でもあった。主が座るヨコザ、長男が座るオトコザ、お母さんが座るカカザ、お婆ちゃん達が座るシモザなど、座る場所が決まつており、囲炉裏はその家の秩序を表している。このように囲炉裏は家族団らんの場合であり、食事、接客の場合であり、暖房も兼ねていた。かつては様々な役目を果たした囲炉裏は、生活様式の変化で使われなくなりつつあるが、建物を燻す効果



も期待しながら、使い続けて伝えていきたい。

「いろりと生活について」

村上和子（岩手・茅葺き民家を残す会）

昔の囲炉裏 朝、お母さんが囲炉裏に火を焚き鉄瓶にお湯を沸かし、お茶を仏さんに供えて、皆で朝ご飯を食べて朝茶を飲む、これが一日のはじまりだった。

田植え時期には濡れた体を乾かし、梅雨の湿気を飛ばし、屋根の茅を燻し、煮炊きの場、もてなしの場、団らんの場、暖房と、一年を通して生活の中で囲炉裏は重要な役目を果たした。今は見学に訪れた子供たちが、本当の火だと喜ぶほどに、



囲炉裏で火を焚く光景がほとんど見られなくなっている。ガスや電気では煮炊きも便利になったが、今でも囲炉裏を体験した人が、「懐かしいな」「心が和むな」というように、精神的な面、和むゆとりのある心を持たせるのは、昔からこの囲炉裏ではないかと思う。精神的な和みや人間の大らかな文化である「火」を子供たちに残してやるのが、これからの囲炉裏の役目ではないか。

「茅葺きの燻蒸効果について」 古海賢一
（栃木・株式会社茅葺き屋根保存協会）

茅葺き屋根はおよそ30年保つと言われていたが、今では15年から20年に縮まったと聞くようになった。囲炉裏やかまどを焚くことにより、茅や木材をコーティングし、燻蒸効果によって茅葺き屋根の耐久性を高めていたと考えられる。囲炉裏やかまどで薪を燃やしたときに出る煙には、有機酸類、フェノール類、カルボニル化合物やアルコール類などの200種類以上の有機化合物が含まれている。これらは、薪の種類によって異なるが、抗菌、殺菌、防虫、酸化防止効果などがある。また、茅葺き屋根には通気性があり、屋根から煙が出ていくので、煙に含まれる有機化合物が茅に付着し、カビや腐朽菌などの雑菌が殺菌、抗菌効

果によって駆除されると同時に防腐処理もされ、建物の耐用年数を高めていた。宇都宮大学と共同で煙燻蒸による抗菌効果の研究を行ったところ、無燻蒸と燻蒸（燻蒸1〜5時間の5種類）のサンプルによる実験で、茅へのカビの取り付き時期と広がり方の状況から、煙成分は抗菌作用を持っていること、さらにその効果は燻蒸時間に比例していることが明らかになった。特に3時間以上の燻蒸ではその効果が顕著で、カビと同等の性質を保つ腐朽菌にも効果があることから、煙による燻蒸が茅葺き屋根とその建物の耐久性を高めるといふ役割を十分に果たすことが確認できた。これらの効果がある燻蒸機械を開発普及しているが、その上で、今、失われつつある家族の絆を強く結びつけるということが最も大きな囲炉裏効果であると思うので、茅葺きの建物のためにも人のためにも囲炉裏を復活させたい。

第2セッション「茅葺きは地場産業になるか」

座長 米山淳一（理事・地域遺産プロデューサー）

「カリヤスの茅刈りと茅葺き 森林組合による取り組み」山口健一（富山西部森林組合森林組合五箇山支所）



森林を守り整備する事業を行う中で、五箇山支所では茅葺きの屋根葺きも大きな事業となっており、年間平均10棟の屋根の葺き替えを行っている。かつては結で行われていた屋根葺きだが、合掌造りの減少、若者の減少により伝統を維持することが難しくなったなどの社会的背景から、昭和50年頃から森林組合でその役割を担うようになった。合掌造りでも、地域や地区によって屋根の形や葺き方が違う。五箇山でも地区によって葺き方が異なるので、さらに勉強しながらこれらの特徴を残していきたい。人材について、数十年前に入った林業の世界

は平均年齢が55歳から60歳近い職場だったが、今は「ターンヤ」「ターン」が増えて若返り、平均年齢が36歳になっている。子供達にむけて茅葺きの体験学習も行っており、さらに普及啓発につとめたい。この地域ではカリヤスをコガヤ、ススキをオオガヤと呼び、主にコガヤを使ってきた。このコガヤの茅刈りや茅場の造成など、材料となる茅の管理も行っている。

「ヨシ刈りとヨシの利用 琵琶湖での取り組み」小寺實（滋賀・ウォーターステーション琵琶湖子供環境班代表）

琵琶湖は飲み水をはじめとして、鳥や魚にも大いなる恵みを与えている。この琵琶湖の恵みは湖岸に生えているヨシと深く関係しているが、琵琶湖のヨシは一時、かつての1/3に減ってしまった。現在はヨシを復活する取り組みにより、2/3まで回復している。ヨシの利用法として、ヨシ葺きの屋根は今ではほとんど見られず、ヨシ簀、ヨシ紙、ヨシ笛、筆簾やオーボエのリードの他、腐葉土として利用している。琵琶湖岸では、ヨシを刈ってから、商品化のために細かく選別する。次の新芽のために、刈り取った後に火入れも行っている。この古く美しい湖には、貝や魚や水草や野鳥など、多



くの生き物が暮らし、水の浄化も含めてヨシは素晴らしい自然環境を育んでいることを子供たちに伝え、次世代に繋いでいきたい。

「ススキの生産と販売」長田友和（静岡・有限会社富士勇和産業）

1 資源 茅場は富士山の南東部にある東富士演習場で、面積は約9000ha。毎年9月から11月に防火帯を設置する作業を行い、秋に茅を刈り、2月下旬に山焼きを行う。

2 労働力 刈り手は地元の入会権を持つ者で、20代後半から70代の約30名。12月1日から2月下旬まで茅刈りを行って

いる。作業は手鎌による手刈りが主流で、早朝から始めると鎌切れがよく作業効率がよい。

3 技術 茅刈りに使う道具は、刈り払い機、大鎌、手鎌の他に、結束する装置を開発。これにより束の大きさが調節でき、労力が軽減できる。

4 出荷・輸送・保管 刈った茅はその日の内に演習場外へ搬出しなくてはならない。刈り取っているのは3haほどで、集荷場に一山200束ほど立てておくが、7万から8万束を刈り取るので、200〜300山できる。

今後の取り組み 富士山麓には、東の東富士演習場のほか、西には朝霧高原、北

には北富士演習場の茅場があるが、西富士、北富士はまだ刈る人が少ないので、地元の人を養成しながら、連携をはかり、刈り手の育成と安定供給、茅を使った特産品の開発、販売などを行い、地元の資源を活かしながら茅文化を守る取り組みをしていきたい。

「根場いやしの里と上条集落の取り組み」石川重人（山梨・伝匠舎株式会社 石川工務所）

山梨での茅葺きの取り組みを紹介。山梨県富士河口湖町に「西湖いやしの里」が2007年にグランドオープンした。かつてここに40数戸の美しい茅葺き集落があったが、昭和41年の台風の水害によって、集落のほとんどが流されてしまった。これを復元しようと、水害から残った民家の保存修理工事を行った他、現在20数棟の茅葺き民家が建ち、かつての集落の思い起こさせる風景となった。

山梨の茅葺き集落として、伝統的建造物群保存地区の早川町赤沢地区のほか、芦川集落、甲州市の上条集落がある。上条集落はかつて養蚕で栄えた名残を残す突き上げ屋根の民家が十数棟あるが、ほとんど全ての屋根が銀色の鉄板で覆われている。この中で、観音堂を茅葺き屋根に復元することができ、「元気な上条をつ

くる会」を設立して、茅刈りや茅葺きのワークショップなどを行って伝建地区を目指して取り組んでいる。

「茅葺き職人から事業所への展開」中野誠（京都・美山茅葺株式会社）

ももとは個人で茅葺き職人としてやってきたが、組織としてやっていかなければならないと思った3つの大きな要因がある。1つ目は、いろんな茅葺き職人と仕事をする中で、クセのある職人さんも多く、気楽に腹をわって話せる環境づくりのためには、組織がよいのではないかなと思ったこと。二つ目は次世代に伝えなければいけないという思い。自分の子



供が跡を継いでくれるとは限らず、組織として伝えていく必要があると考えたと。三つ目は、自分が職人になった頃、まだ日本では職人の地位が低いと感じることが多く、その理由として天候に左右される仕事であることや、それによって収入も安定しないことがあった。これら

によって自分が苦労してきた経験から、これからの若い人には少しでもその思いをしなくてすむように、組織化して月給制にしようと考えたこと。4人で立ち上げた会社が、現在は7人になり、平均年齢は39歳。弟子の3人も事業所としてやっており、4つのグループで連携して仕事をしている。茅葺きは人にも地球にもツケを残さず、茅葺きが日本だけでなく地球を救うであろうと思う。50年先に孫やひ孫に「茅葺きが減るどころか増えとるし、温暖化も心配せんでも大丈夫やったな」と笑って死ねるように生きたいと思う。

「南アフリカ共和国の茅葺き業」田揚裕子（工学院大学大学院工学研究科）

南アフリカでは、ビルが立ち並び、スタジアムや大型ショッピングモール建築などが急激に進む一方で、お金持ちのステイタスとして茅葺き屋根の住宅が流行している。南アフリカで茅葺きが盛んな



理由の一つに、1997年に発足した茅葺き協会がある。協会は悪質な業者を減らし、基礎を築き優れた茅葺きの仕事ができることを目的に会員の育成を行っている。しかし、まだ茅葺き業者の20%しか入会していないのが現状。協会では学生のための茅葺きコンペを行うなど、学生の育成にも力を注いでいる。また、国家基準の制定にも関わり、茅葺き工事に関して、定義、必要条件、構造上のデザイン、建築工事、屋根工事の手順、防火、屋根の品質評価の7つの項目で仕様を詳細に定めている。南アフリカで使われている茅は、主にFine thatching grass、Cape reed、Water reedの三種だが、いずれも日本のススキやヨシに

比べると細い。茅は南アフリカで採集したもののみを使い、海外からの輸入は認められていない。LadySmithでは茅刈りは6〜9月に行われており、一日800人が働いている。茅の葺き方は、押しほこがないことや仕上げを刈りこまないことは日本とは異なるが、ガングリを使って仕上げを整えるなど、日本と共通する事柄も多い。特徴的なのは、仕上げの際に内側からも茅を再度入れ、内部からの意匠や美観も意識している点である。また、防火に関して、炭素繊維のシートを茅と茅の間の中に入れ、茅に着火してしまった場合の火災による被害を最小限に抑えられるような施工を行っている。年間施工数のうち、新築が6割を占めている。南アフリカで茅葺きが増加傾向にある理由は、①自由なプランニングに加え、環境問題への関心などを理由とした施主からの要望と、②労働者の雇用対策という施工側の責任の二



○写真展「茅葺きの技」

南砺市フォーラム開催中に、会場ロビーにて「写真展「茅葺きの技」」を開きました。この写真展は、会員の皆さんよりお寄せいただいた「茅葺きの技」に関する写真のパネル展示会です。

今回は五箇山の写真を中心に展示し、写真を提供してくださったのは、会員の杉原バーバラさんです。杉原さんは、80年代、翻訳業のかたわら、外国に住む人に日本文化を紹介する記事を書いていました。その中で、日本の「茅葺き」に出会い、1997年には埼玉県高市で初めて茅葺きの現場を訪れました。その時に感じたのが、後継者不足の問題。せめて記録写真だけでも残さなくては、との思いから、茅葺きの写真を撮り始めたそうです。

1999年には五箇山の相倉集落を訪れ、五箇山の茅葺きに魅了されてから、早10年以上が経ちました。職人である森林組合の方々の仕事に触れ、五箇山の茅葺きの記録を残すべく、撮り続けた写真の一部を今回展示させていただきました。

茅葺きというと、つい、その民家や集落など、完成した屋根にだけ目が行きがちですが、その屋根を支えているのは、様々な「技」です。写真展が、それらに目を向けるきっかけになれば幸いです。(内海美佳)



西湖いやしの里 「旧渡辺宅」

修復整備された、
昭和41年の災害を
のがれた民家

昭和20年6月竣工

基本設計
筑波大学・
安藤研究室

茅葺き文化を 学び・伝え・創る
伝匠舎 (株) 石川工務所

URL <http://www.densho-sha.co.jp>

桧皮葺・柿葺・茅葺・銅板葺・古建築木工事



SHAJI

田中社寺株式会社

〒500-8483 岐阜県岐阜市加納東丸町2丁目20番地

TEL 058-272-2871(代) ・ FAX 058-276-1329

<http://www.tanakashaji.co.jp>

E-mail: info@tanakashaji.co.jp

*広告も随時募集しています！

「神戸大会2009をふりかえって」

内海 美佳

○茅葺き職人育成

当日本茅葺き文化協会にはたくさんの方の茅葺き職人さんが入会していますが、会員の村上和子さんは、茅葺き民家所有者であり、茅葺き職人の育成者でもあります。

村上さんは、岩手県一関市にある村上家住宅（岩手県指定有形文化財）にお住まいですが、ある時、近隣にまだ茅葺き民家は残っているのに、茅葺き職人がほとんどいないことに気付き、茅葺きの保存に危機感を感じました。そこで、平成17年に市の補助を受け「かやぶき職人を募る会」を設立し、3年間研修を行いました。6名がその研修を修了し、茅葺き職人の後継者を育成することができたそうです。

村上さんの熱意は、茅葺き職人の育成にとどまらず、平成21年には「かやぶき民家を残す会」を設立します。この会は、茅葺き民家の所有者や茅葺き職人、一般協力者などで構成され、茅葺き民家を残すために、無尽を作り、啓蒙活動をすることを目的としています。

一番茅葺きの魅力を知り、茅葺きの悩みを持つのは、やはりそこに住む人だと思います。村上さんから生まれた、茅葺きの輪が今後ますます大きくなることを期待しています。

○若者の力

神戸大会のテーマは、「都市と農村の協働する茅葺き民家」でしたが、特に目立っていたのは若者の存在。パネルディスカッションには、活発に活動している学生グループが登場しました。

私が初めて参加した、当協会前身の全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会の全国大会は、平成18年度の茨城県石岡市で開催された大会でしたが、その時の学生の参加者は、私を含め数名しかいませんでした。その後、年々、学生の参加者が増え、今では、当協会は若者の力に支えられていると言っても過言ではありません。

パネルディスカッションの発表にあった、学生主導による民家の再生などは、若者の柔軟な発想やフットワークの軽さだけでなく、それを受け入れてくださる地元の方や、指導してくださる職人さん達の理解があってこそです。これからも、たくさんの方々が、茅葺きというフィールドでのびのびと活動できるよう、ご支援いただけるようお願いさせていただきます。

○農村歌舞伎舞台について

神戸市北区には農村歌舞伎舞台があり、現存する5つのうち、4つをローテーションで使用し、毎年、歌舞伎上演会を開催しているそうです。大会2日目の見学会では、その1つである、立派な茅葺

き屋根を持つ、山田町下谷上の天彦根神社境内にある歌舞伎舞台（国指定有形民俗文化財）を見学しました。こちらの歌舞伎舞台には、皿回し式の回り舞台や大迫りなど、様々な舞台機構があります。また、花道の一部が回転して裏側にある反り橋が現れる「花道の裏返し機構」は現存する全国唯一のものだそうです。見学では、舞台上がらせていただき、特別に回り舞台を体験させていただきました。

神戸市北区では、平成11年度より「農村歌舞伎体験教室」を開催し、農村歌舞伎の役者や裏方の育成に励んでいます。体験教室受講者もまた、上演会での披露を目指しているそうです。

茅葺きと農村歌舞伎。どちらも、人の手によって受け継がれてきた伝統です。茅葺き屋根の下で演じられる農村歌舞伎を、ぜひ一度観てみたいです。



〈編集後記〉

日本茅葺き文化協会の発足とともに、新たなネットワーク活動をめざして大きく世界に羽ばたきたいと思っています。「茅ふきたより」では、茅葺き民家に伝えられた日本の住まいと暮らしのメッセージを各地からお届けいたします。

茅ふきたより 第1号

2011年2月4日発行（非売品）

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒300-4212 茨城県つくば市神郡108

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL <http://www.kayabun.or.jp>

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！

茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。